

臨地実習における訪問歯科診療同行実習の現状

木口友美

明倫短期大学 歯科衛生士学科

The Current Situation of Home-Visit Dental Treatment Accompanying Practice in Clinical Training

Tomomi Kiguchi

Department of Dental Hygiene and Welfare, Meirin College

日本は高齢者人口が過去最高に増加し、居宅や施設で生活している障害や認知症を有する要介護高齢者も年々増加してきた。それらの人々が「口から食べる」を実現し、元気に生活するためには歯・口腔機能の回復が重要である。歯科治療に通院できない要介護者のために訪問歯科診療が注目されるようになってきたが、それに対応できる歯科衛生士の教育は重要であり、本学では平成9年より、歯科衛生士学科の臨地・臨床実習に訪問歯科診療同行実習を取り入れた。その現状把握と学生の意識について調査した結果、学生一人当たりの同行実習回数は 7.9 ± 2.6 回であり、実習内容としては、義歯修理・調整・新製が最も多く、つぎに、歯科口腔介護で、ほぼ全員の学生が体験した。また、訪問先で多かったのは、各種有料老人ホームの32%、介護老人保健施設の31%であり、居宅は僅か4%であった。本実習を通して、学生は歯科診療所とは異なる環境での診療方法や訪問歯科診療の必要性・重要性を知ることができたうえ、技術のみでなく感染予防の観点や家族・介護者への気遣いなど、高齢社会を支える歯科医療従事者を目指す者として、本実習は、今後役に立ったと推察される。

キーワード：臨地実習、訪問歯科診療、現状

Keywords: Clinical Training, Home-Visit Dental Treatment, Current Situation

I. 緒言

日本は現在、65歳以上の高齢者人口が過去最高の3,190万人となり、超高齢社会を迎えている¹⁾。それに伴い、居宅や施設で生活している要介護高齢者や認知症を有する高齢者は年々増加している²⁾。今までの歯科医療は外来を中心に行われていたが、年齢階級別歯科受療率では75~80歳以上の年齢層は急激に低下している³⁾。今までは一部の医療機関が対応してきたが、今後は益々増加していくことが予想される。

そこで、本学では訪問歯科診療に対応できる歯科衛生士を養成するため、平成9年より、本学附属歯科診療所における訪問歯科診療同行実習を開始し、平成22年からは全員が本実習に参加するようになっ

た。今後さらに実習効果を高めるため、その現状と学生の意識について調査し、今後の課題について検討した。

II. 対象および方法

対象は、平成25年10月から26年9月まで明倫短期大学附属歯科診療所において臨地・臨床実習を行った本学歯科衛生士学科3年女子67人（平均年齢： 20.2 ± 1.3 歳）である。調査は、平成25年度臨地・臨床実習Ⅰ（18週）、平成26年度臨地・臨床実習Ⅱ（24週）の12ヶ月間の期間、本学附属歯科診療所の実習期間中（Ⅰ期：6週、Ⅱ期：6週）に実施した訪問歯科診療同行実習についてアンケートを実施した。内容は、一人当たり訪問歯科診療同行実習回数、訪問先別実習生延べ人数、実習内容（歯科診療補助、歯科

口腔介護、見学等)、役立ったこと・わかったこと、困ったこと及び感想(自由回答)等についてである。なお、アンケートは平成26年12月に記名自記式により実施した。

Ⅲ. 結果

1. 学生一人当たり訪問歯科診療同行実習回数

学生一人当たりの訪問歯科診療同行実習回数を図1に示す。一人当たりの実習回数は、5回・8回の者が最も多く各10人(15%)で、次に6回、9回、10回および11回以上の各々、9人(13%)で、最少は3回が1人(1%)であった。一人当たりの平均回数は 7.9 ± 2.6 回で、概ね、1.5週に1回の頻度で比較的多い回数であった。

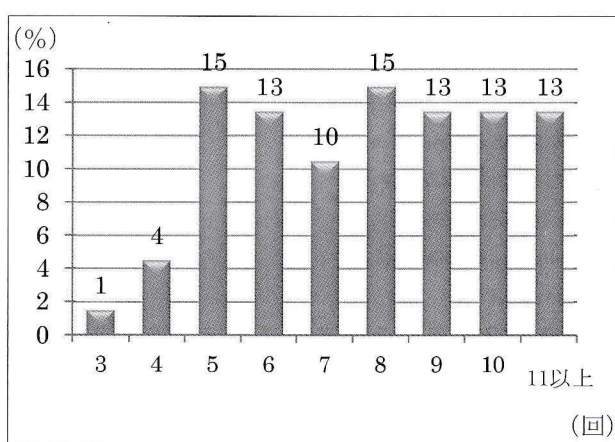


図1. 学生一人当たり訪問歯科診療同行実習回数(n=67)

2. 訪問先別同行実習生の延べ人数

訪問先別同行実習生の延べ人数を図2に示す。各

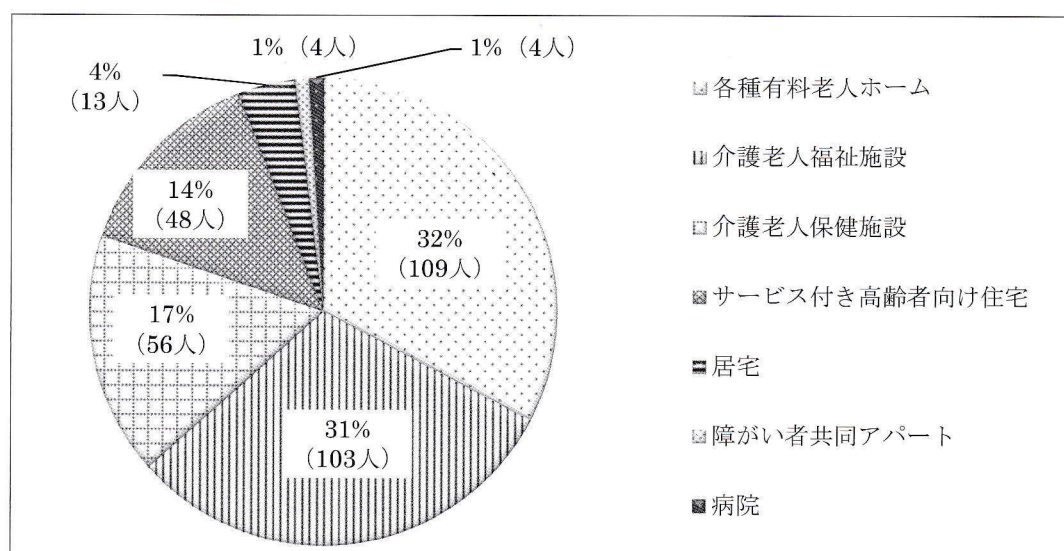


図2. 訪問先別同行実習生の延べ人数の割合(n=67:複数回答)

種有料老人ホーム(有料・住宅型有料・介護付き有料・軽費老人ホーム)(7施設)が109人(32%)と最も多く、介護老人福祉施設(3施設)が103人(31%)、介護老人保健施設(2施設)が56人(17%)と続いた。居宅への訪問歯科診療同行者は13人(4%)で予想以上に少なかった。

3. 訪問歯科診療同行実習内容の割合

訪問歯科診療同行実習内容の割合を図3に示す。学生同行時の実習内容は、概ね、歯科診療補助、歯科口腔介護、見学に分類された。経験した実習内容で最も多かったのは、義歯修理・調整の診療補助が61人(91%)で、見学の6人(9%)を合わせると全員の67人(100%)が経験していた。次に、補助と見学を合わせると、歯科口腔介護が66人(98%)、義歯作製が61人(91%)、う蝕処置が57人(85%)、歯周治療が51人(76%)で、訪問診療で行う多くのことを経験していた。

4. 役立ったこと・わかったこと、困ったこと

訪問歯科診療同行実習を経験して、役立ったこと・わかったことを図4に示す。最も多かったのは、診療中の患者への声かけの方法で14人(21%)、次に、座位での歯科診療方法が13人(19%)、また、いろいろな患者(難聴者、高齢者、認知症の方ほか)への接し方が12人(18%)であった。その他において、ライティング方法、頭支え等の歯科診療補助や歯科口腔介護の大切さ、挨拶、診療所と訪問診療での処置の違い、患者への気遣い、感染患者への対応など

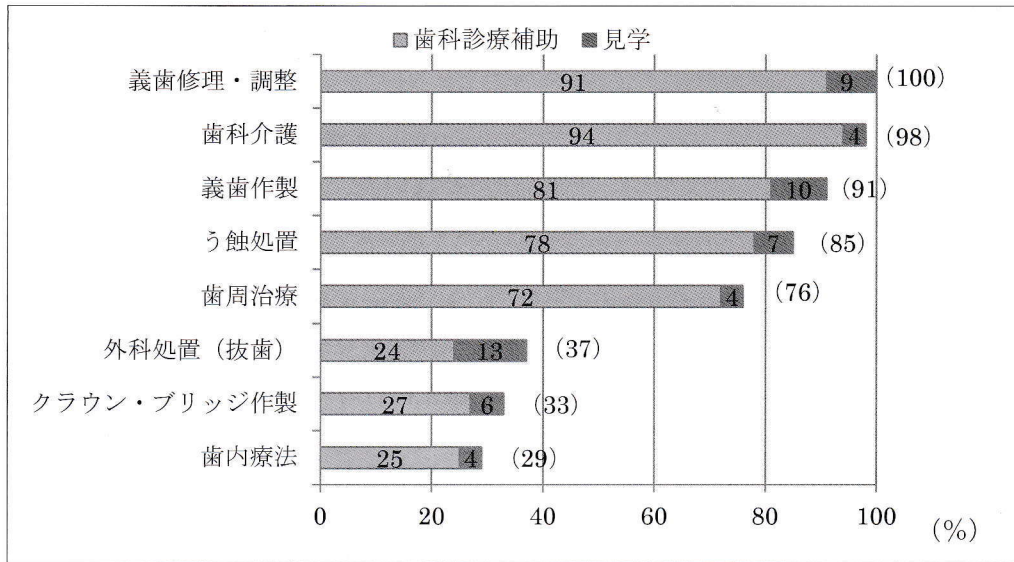


図3. 訪問歯科診療同行実習内容の割合 (n=67: 複数回答)

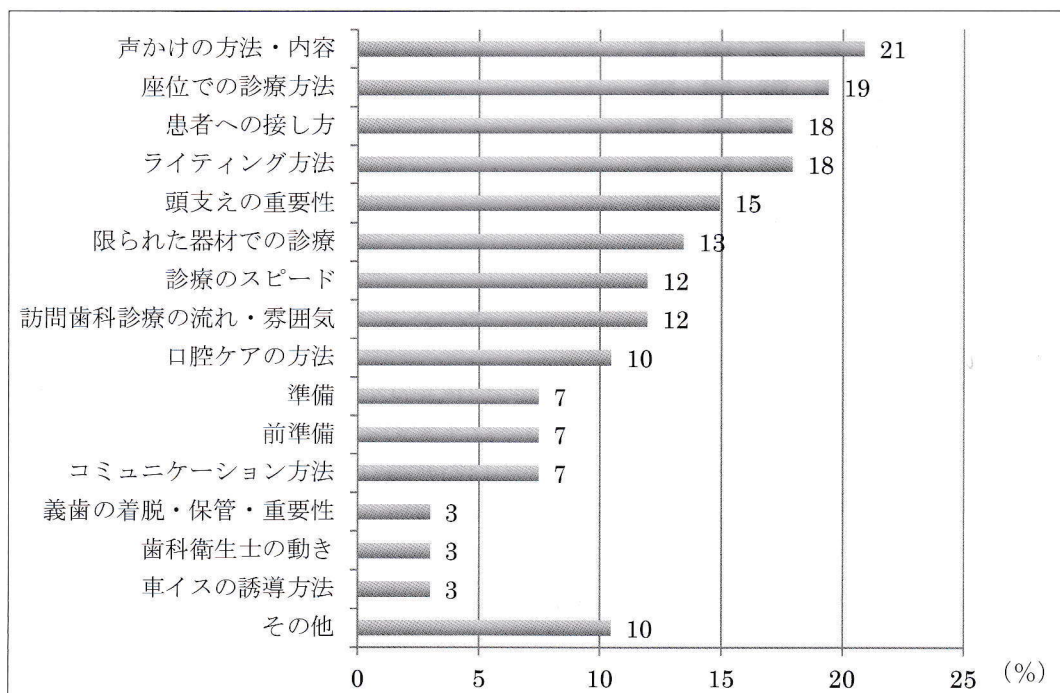


図4. 同行実習により役立ったこと・わかったこと (n=67: 複数回答)

多くのことが挙げられた。

つぎに、訪問歯科診療同行実習で困ったことを図5に示す。最も多かったのはライティングの17人(25%)で、つぎに、器材の事前確認が7人(10%)、意思疎通困難者とのコミュニケーション方法が6人(9%)と続いた。また、その他においては、食物残渣、高齢者に合わせた印象材の硬さ他が挙げられた。

5. 感想

訪問歯科診療同行実習を通しての学生の感想(自由回答)をまとめると図6に示すとおりであった。最も多かったのは、「訪問歯科診療を体験し、良い経験になった」の14人(21%)で、次に、「勉強になった・もっと勉強したい」の9人(13%)、限られた環境での治療の困難さ、訪問歯科診療の必要性・重要性など多くの気づきが挙げられた。また、その他の項目の中では、「他の実習先も経験したかった」、「診

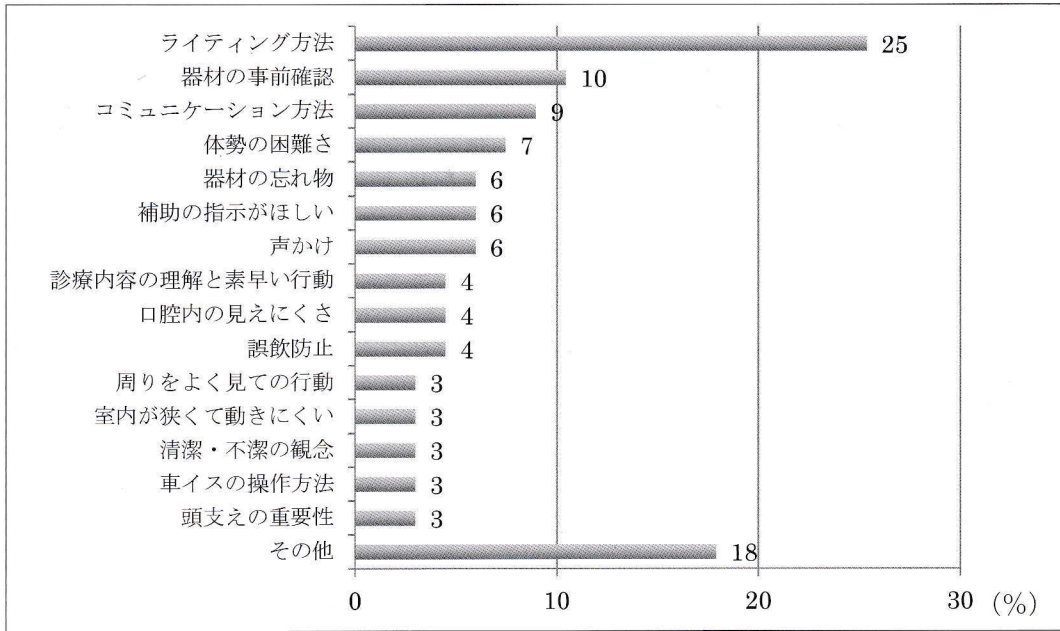


図5. 同行実習において困ったこと (n=67:複数回答)

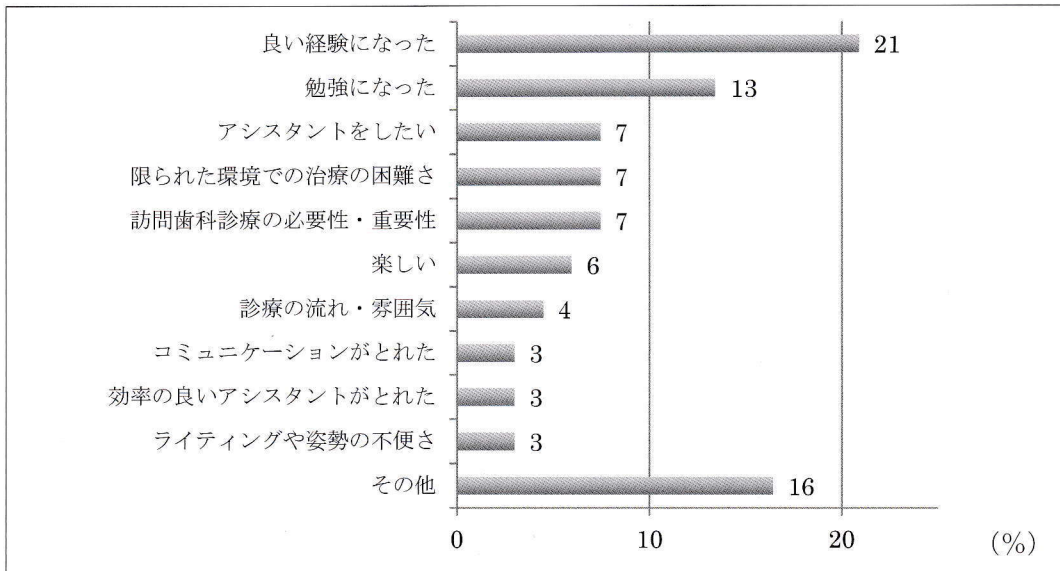


図6. 同行実習の感想 (n=67:複数回答)

療所での処置との違いに対する戸惑い」, 「忘れ物厳禁」など訪問歯科診療ならではの感想が挙げられた。

IV. 考 察

1. 歯科診療訪問先

訪問歯科診療同行実習回数にばらつきがでたのは、実習期間や実習日の訪問診療予約数などの他、学生の希望も考慮したことが原因ではないかと推察。また、学生にとっていろいろな訪問先を経験することが望ましいが、本学附属歯科診療所の特徴として、各種老人ホームや介護老人福祉施設との契約

が多い関係から、居宅や障害者共同アパート、病院等への訪問歯科診療が少なくなっていると考えられる。また、居宅等で生活している障害者や要介護高齢者および介護者への訪問歯科診療システムの周知不足や、歯・口腔の健康の重要性が認知されていないことも、利用者が伸びない原因と思われる。今後は、歯友会居宅介護支援センターのケアマネージャーを通し、訪問歯科診療システムの周知につなげていきたいと考えている。また、現在通院中の患者に対し訪問歯科診療システムを紹介することで、将来、要介護状態となり訪問歯科診療を必要となっ

た時に、家族が依頼しやすくしていくことも大切であると考えている。現代社会ではインターネットの普及によりウェブページで情報収集を行う者も多いため、ホームページも有効活用していく必要があると思われる。一方、施設における訪問歯科診療は、一度に多くの利用者の治療に関わることができるうえ、比較的広いスペースを確保しやすいことから、効率よく治療し易い環境と思われる。その反面、居宅等での治療は設備・環境面などで制約が多いが、居宅ならではの家族への配慮や治療時の工夫、感染予防など、学生にとって学ぶことは多く、重要であると考えている。

2. 実習内容

実習内容として、全学生が体験した義歯修理・調整・新作製が多かったのは、加齢に伴う喪失歯の増加¹⁾や、歯槽骨・歯肉の老化による退縮が現れることから当然の結果と言える。学生は障害者歯科・高齢者歯科や歯科口腔介護学の講義をはじめ、要介護高齢者の歯・口腔の現状や「口から食べる」ことの重要性を認識しており、要介護高齢者の補綴治療の意義と重要性を学ぶよい機会になったと考える。

また、実習内容として歯科口腔介護が多かったのは、学生自身が、介護保険施設実習において、歯科口腔介護の手法を習得していることから、学生が直ちに対応できたことと、口腔介護の重要性を十分理解していたためと思われる。高齢者は脳血管障害やアルツハイマー病、認知症などの疾患を有しているものが多く、口腔清掃が不十分で誤嚥性肺炎を併発しやすい状況にあるため、歯科口腔介護の実施は効果的であったと推察される。

3. 実習成果

訪問歯科診療同行実習を通して、学生は多くの気づきと感想を挙げた。歯科医師や歯科衛生士の高齢者への対応やコミュニケーション方法を見学したことにより、高齢者との接し方を学ぶことができたと考えられる。また、歯科診療所とは異なる環境での診療方法や訪問歯科診療の必要性・重要性を知れたうえ、感染予防の観点や家族・介護者への気遣いな

ど、技術のみでなく高齢社会を支える歯科医療従事者を目指す者として、実習は今後役に立ったと考える。さらに、訪問歯科診療あるが故、器材の準備・後始末の重要性、限られた環境での工夫、忘れ物厳禁など、技術面での気付きは貴重であったと言える。

今後の課題として、居宅での訪問歯科診療同行の機会を増やすとともに、事前準備や歯科診療補助に直接関与する回数を増やして、歯科診療所における実習との違いを学び、実力をつけて、訪問歯科診療の場で即戦力として活躍できるようにしていくことである。

V. 結 論

本学が平成9年から開始した訪問歯科診療同行実習の取り組みに対する現状把握と学生の意識を知るための調査より、つぎのことが知られた。

1. 訪問歯科診療同行実習回数は、学生一人あたり 7.9 ± 2.9 回であった。
2. 学生が体験した実習内容で多かったのは、義歯修理・調整が67人 (100%)、歯科口腔介護が66人 (98%)、義歯新製61人 (91%)、う蝕処置が57人 (85%) であった。
3. 本実習は、学生が歯科診療所内診療と訪問歯科診療の違いを体験し、その必要性や重要性、歯科衛生士の果たす役割を理解するのに役立った。

文 献

- 1) 内閣府：平成26年版高齢社会白書，2014
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/sl_2_3.html (2014,10,30閲覧)
- 2) 一般社団法人 長寿社会開発センター：六訂介護支援専門員基本テキスト 第1巻介護保険制度と介護支援：4-5, 2012
- 3) 厚生労働省：平成20年患者調査, 2008 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/11/dl/01.pdf> (2015.3.17閲覧)
- 4) 一般社団法人口腔保健協会：平成23年歯科疾患実態調査報告：74-76, 2011